

《第十二章・自と他が為したことを考察する。》

第二項 [依るものである苦しみが有る理由を否定する] に三項目がある。[章の著述を説く]、[了義の教証と合わせる]、[意味を要約して章の名を示す] である。

第一項 [章の著述を説く]

ここに言う。「我は本性として有る。(何故ならば) それと関係を持つ苦しみが有る故である。経証より、『近く取る五蘊を苦しみ (という)』と説かれたので、それも有るが、その苦しみの拠所無くしては無いので、拠所は有るけれど、それも我である。」

これを否定するにあたり二項目がある。[苦しみが自性として有ることを否定する]、[その正理を他の現象にも適用する] である。

第一項 [苦しみが自性として有ることを否定する] に二項目がある。[主張命題を挙げる]、[理由を示す] である。

第一項 [主張命題を挙げる]

そこで、「或る対論者が『苦しみは我が為した』、或る者は『苦しみは自らより他義 (他のもの) が為した』、他の者は『自他双方が為した』、誰かは『苦しみは無因より起こる』と主張されるその苦しみの、一切の様相において、本性として生じさせられるもの (結果) として適さない。」と主張命題を挙げた。

苦しみの本性となったものが生じさせるとは、数論 (サーンキヤ) 派が主張するが、苦しみの本性はプトガラ (プタガラ) の我が為したと勝論 (ヴァイシェシカ) 派等が主張する。苦しみの本性は自らの生じさせるもの (因) と、自らの性相として別であるとは、自部 (仏教徒) と、他 (非仏教徒) によっても主張される。自他双方が為したとは、耆那 (ジャイナ) 教において、因のうち身体が為したものは身体が苦しむので「自らが為した (苦しみ)」と、命¹が為したものは、苦しみより他であるので「他が為した (苦しみ)」であると言う等である。「(苦しみは) 因無くして起こる」とは、順世 (ローカーヤタ) 派達が主張する。

第二項 [理由を示す] に二項目がある。[苦しみの自他各々が為したことを否定する]、[二つの集合が為したことと、無因であるという言説を否定する] である。

第一項 [苦しみの自他各々が為したことを否定する] に三項目がある。[苦しみ

¹ 命：命者。ジャイナ教徒の言う転生していく「我」。

を基として、自他各々が為したことを否定する]、[プトガラを基として、各々が為したことを否定する]、[自他各々が為していない他の理由を示す] である。

第一項 [苦しみを基として、自他各々が為したことを否定する] に二項目がある。[苦しみを基として、自らが為したことを否定する]、[苦しみを基として、他が為したことを否定する] である。

第一項 [苦しみを基として、自らが為したことを否定する]

もし、その苦しみの自性は、自らの我性が為したとなれば、苦しみの自性によってまさしくそれをする事になる。それ故に、因縁に依拠して起こるとはならず、自らが有るならば自らが生じさせる必要はないが、自らが無ければ、生じさせるものとして適さない故である。

縁起ではあり、何故ならば、死ぬ時のこれらの蘊に依拠して、生の部分に結ばれるそれらの蘊が起こる故である。

然れば、苦しみの自性は自らが為したとは正理ではない。

第二項 [苦しみを基として、他が為したことを否定する]

もし、死ぬ時のこれらの蘊より、生の部分となるそれらの蘊が自性として他であり、もし生の部分に結ばれるそれらの蘊よりも、死ぬ時のこの蘊は自性として他であるならば、現在のそれら他の蘊が、未来のその蘊を為したとなるので、苦しみの自性は他が為したとなるが、それは不合理である。(何故ならば) 自性として他として有るならば、因果の関係性が留まらぬ故と、

「何かに依拠して何かが起こる。」²

等と、説かれるだろう如くである。

後の二行は『ブッダパーリタ』と『般若灯論』において、

「それらの他が集まり為したので、苦しみの自性は他が為したとなる。」³

と訳したようにすると解り易い。

第二項 [プトガラを基として、それぞれが為したことを否定する] に二項目がある。[プトガラ自らが為したことを否定する]、[他のプトガラが為したことを否定する] である。

² 「何か…起こる。」:『根本中論』第 18 章 10 偈。

³ 「それら…となる。」:『根本中論』第 12 章 3 偈後 2 行。デルゲ版を基にしたデプン・ロセルリン版『ブッダパーリタ』では、「それらの他がこれを為したので、苦しみの自性は他が為したとなる。」

第一項 [プトガラ自らが為したことを否定する]

もし、「苦しみそのものによって苦しみが為されたことを、『苦しみは我が為した』とは言わない。しかし、プトガラ自らによって自らのその苦しみが為されたのであり、他のプトガラが行為して、この者に与えたのではないので、苦しみは我が為したと言う。」といえよ。

もし、人であるプトガラ、我によって、その「人であるプトガラ」に結び付ける苦しみが為されたならば、その苦しみを為したそのプトガラとは、為した苦しみ以外の何ものであろうか。「その苦しみはこれであるが、その苦しみを為す者はこれである。」とそれぞれに分けて、「これによって、これが為された。」と述べなければならぬが、そのように述べられることも無い。

もしまた、人の苦しみの近取を持つものであるプトガラによって、天の苦しみが為されたと考えれば、そのプトガラは、我が我のその苦しみを為したのではないが、他の苦しみを我が為したことになるだろう。⁴

「もし、その二人のプトガラは近取の蘊が別であろうとも、プトガラは別ではない。」といえよ、それも正しくない。(何故ならば) 近取より他の意味としてプトガラが示されることはできない故である。⁵

第二項 [他のプトガラが為したことを否定する]

もし、「人であるプトガラが人の苦しみを為すのではないが、その者が天に生まれるだろう天の苦しみを為して、天であるプトガラに与え、その天の苦しみによっても、『天であるプトガラ⁶』と名称を付けることをする。」といえよ。

もし、天より他の、人であるそのプトガラより天の苦しみが起こるならば、一人の人である他のプトガラがその苦しみを為して与えるところの、天であるそのプトガラは、与えられるその苦しみ以外に、他の何が如何様に有るとなろうか。それは無い。

もし、人である他のプトガラより、その天の苦しみが起こるならば、その天の苦しみを為して他である天に与える、或る近取の苦しみが「人であるプトガラ」と名付ける他のプトガラとは、自らの近取の苦しみ以外の何であらうか。それは無い。

それに与える対象と、それが与える者が自性として有るならば、自らの近取の苦しみより自性として別であると見出さなければならぬが、それは見付からない。

⁴ 人の…なるだろう。：人の五蘊に名付けられたプトガラ（人）が、来世の天の苦しみの因となる行為を為したならば、彼は人間自身の苦しみの因を為したのではなく、他である天の苦しみの因となる行為を為したとなる。

⁵ 近取より…故である。：近取（蘊）より別個にプトガラは存在しないので、近取が別であればプトガラも別になる。従って、近取（蘊）が別でありながらプトガラが同一であることは適わない。

⁶ 天であるプトガラ：天界に属するプトガラ。神。

与える者であるプトガラを否定する偈は、『ブッダパーリタ』と『般若灯論』に記されていないが、『顕句論』では、二偈にそれぞれの説明をなされた。

他にも、もし、苦しみはプトガラ自らが為したことが自性として成立したならば、苦しみは他が為したことも自性として成立するが、「苦しみを我が為したことは、自性として有ると成立していない」と前述したので、それらの苦しみは他が何処で為そうか。為したとは成立しない。その理由とは、他が或る苦しみを為すとは、他であるその人の「我」が為したのである故である。

「もし、その人が、その苦しみを我が為したのでなければ、その天の苦しみは他が為したと如何様になるうか。」⁷

と、『ブッダパーリタ』より説かれ、『顕句論』と意味は似ている。

第三項 [自他各々が為していない他の理由を示す]

先ず、苦しみは我が為したのではない。(何故ならば) 苦しみそのものが、それ自体を為していない故であり、自らに対して行為することは矛盾する故である。

もしその苦しみは、自性として存在する他が為したと言うとしても、そう何処でなろうか。そうはならない。(何故ならば) 「これが為す。」と考察される他は、我が為していない—自らの自性として成立していないので、他の因に相互関係した故である。

『ブッダパーリタ』より、その苦しみはプトガラ自らが為したが、プトガラも苦しみより他ではないことを思惟して、「苦しみが苦しみを為した。」と言うが、そのプトガラがその苦しみを為し、それ(プトガラ)は苦しみではないことを思惟して、「苦しみは他が為した。」とも言う者へ対し、一行目で近取の無い単なるプトガラだけの者は無いので、苦しみはプトガラ自体が為したことを否定する。二行目で、苦しみそのものがまさしくそれを為したことを否定するが、後の二行で、苦しみ以外に(苦しみに結ばれていない)我は無い理由によって、苦しみは他が為したことを否定する。

第二項 [二つの集合が為したことと、無因であるという言説を否定する]

もし、『それぞれの苦しみを各々が為したことは無いけれど、双方が集合して為したことは有る。』と思えば。

車輪などの各々に馬車が設けられることは無くとも、部品の集合に依拠して馬車であるとする如くであれば、そう言おうとも正しいが、ここでは、殺生を各々より為していなければ、この双方ともが「殺生を為した。」とすることはできぬが如くである。

⁷ 「もし…なるうか。」:『ブッダパーリタ』本文より「もし、それは、それが我によって為したのでなければ、如何様に、一方のそれを他が為したとなろうか。」

然れば、もし、自他各々が苦しみを為したとなれば、その苦しみは双方が集合したものによって為したとなるが、各々が為すのではない。(何故ならば) 前述で既に否定した故である。斯くも説かれた論法によって、その苦しみは我が為しておらず、他も為していなければ、苦しみは因無くして起こると何処でなろうか。そうはならず、虚空の花の良い香りの如くである。

そのように、苦しみは自性として無い故に、その拠所である我も、自性として有るのではない。

第二項 [その正理を他の現象にも適用する]

そのように、内側(心相続に関わる)の有情の苦しみのみについて、「我が為した」等の四様相が有るのではないに尽きず、外界の事物である種子と芽や、壺や絨毯等一切においても、「我が為した」等の四様相は有るのではないと、前述の如く知りたまえ。

もし、これらの内外の事物において、「我が為した」等の四様相が無ければ、これらが存在することは必要であるので、如何なる様相によって成立するのかといえ

ば。そこで、これらは自性として有る、無いと探求することに沿えば、これら苦しみ等が本性として有るならば、「我が為した」等の四様相の何れか一つとして成立していなければならぬ。しかしそれは前述のように無いので、苦しみ等は本性として有るのではないと確かめられる。(何故ならば) 行渡るもの⁸があり得ない故である。

あるいは、単なる誤りによって我性が有ると見出される苦しみ等の世俗(全て偽り)、依拠し関係して起こる(縁起生)の構成を探求するならば、「我が為す」等の四様相を捨てて、第八章で説かれた様相によって、縁そのもの、ただこれだけの縁起が成立したので、有ると承認すべきであり、

『苦しみは我が為した』『他が為した』『双方が為した』『無因である』と論争者は主張する。貴方は依拠して起こると説かれた。」

と説かれた如くである。

『ブッダパーリタ』よりも、

「もし苦しみが無ければ、教示者が『迦葉よ。苦しみは有り、私は苦しみを知った。見た。』と説かれたことは如何なるものかといえ。『苦しみは無い。』と誰が言ったか。吾輩が『それ故に、依拠して起こるとはならない。』⁹と言

⁸ 行渡るもの: 「苦しみ等が本性として有ること」に行渡るもの。「事物が本性として有ること」等。

⁹ 『それ故…ならない。』: 『根本中論』第 12 章 2 偈 2 行目。

っていないか？それ故に吾輩は、苦しみは縁起生であると言うが、我が為した等とは言わぬ。」¹⁰

と説かれた。

然れば、我が為したことを縁起生である理由によって直接否定し、他が為したこともまさしくそれによって否定すると二註釈ともが説かれ、それ故に、双方が為したこともそれが否定する。

無因で起こることは、その理由によって否定することが非常に明らかである。従って縁起である因果の次第を疑いなく承認しなければならないこと自体によって、自性として有ることを否定して、まさしく本性が無いことにおいて一切の行為対象と行為が合理であると示すことを、始終一貫して知ることは非常に重要である。(何故ならば) それのみとして成立した・成立していないと分析する正理によって、因果の縁起の次第が否定されたと捉えれば、因果を自説において承認したことが無くなる。従って、「その者に対しては微妙な無我を示さず、大まかな無我を示して導かなければならない」と説かれた故である。

第二項 [了義の教証と合わせる]

そのように、諸法（現象）は我と他と双方によって為されたことと、無因を否定したことは、深甚な教証によっても成立したと示す為と、「そのように示す一切の善説は、本章によって説明したまえ。」と示す為に、了義の教証と合わせた一部のみを言えば、

『三昧王経』より、

「世俗として勝者は法を説かれた。有為無為¹¹であり、そのように相対する。清浄そのものとして我と人は無く、全ての衆生の性相はこれに似る。善悪の諸業は壊れず、我が為したことは我が経験することになる。業の果が移行するとはならず、無因であるとしても経験することにはならないだろう。一切の有（輪廻）は幻であり、自在ではない。空虚で空殻となった水面の気泡の如くである。幻や逃げ水のように常に空っぽである。声音によって説かれても、それらは遠離している。洞窟と山や、深谷や河谷等で、縁によって斯くもこだまが起こるように、その如く、この全ての有為を知りたまえ。一切の

¹⁰ 「もし…言わぬ。」：『ブッダパーリタ』より「『もし、そのように苦しみが無ければ、世尊が〈迦葉よ。苦しみは有り、私は苦しみを知った。見た。〉と説かれたことは如何なるものか。』説く。『苦しみは無い。』と誰が言ったか。吾輩が『それ故に、依拠して起こるとはならない。』と言わなかったか？それ故に吾輩は、苦しみは縁起生であると言うが、『我が為した』『他が為した』『双方が為した』『無因より起こった』とは言わぬ。」

¹¹ 有為無為：自らの因縁（原因と条件）によって生じたものごとと、そうでないもの。
[第 1 章] 脚注 47 参照。

衆生は幻や逃げ水の如くである。」
と説かれた。

第三項 [意味を要約して章の名を示す]
意味の要約は既に述べた。

「我が為した・他が為したを考察する」という十偈の我性である、第十二章の解説である。

DECHEN 訳